

「高校生のための学びの基礎診断」

学科・学年混合で行う  
振り返り会で、生徒に  
学びの意義を浸透させる

変革のステップ

背景と課題

- 年度当初に実施した「高校生のための学びの基礎診断」の結果返却時に、生徒の学習意欲を喚起するフィードバックを行うことができなかった

実践内容

- 有志の教師のチームで「振り返り会」を企画  
2回目の「高校生のための学びの基礎診断」に向けて、有志の教師が集まり、返却方法を検討。自校にとっての実施の意義を「生徒が学習のPDCAサイクルを回せるようになること」と整理し、かつ、楽しみながら「学び」の大切さを実感できるようにと、結果を振り返る会として「マナフェス」を企画。「高校生のための学びの基礎診断」の意義を伝え、学科・学年が混在したグループでのワークショップを実施

成果と展望

- 生徒にPDCAサイクルの概念が浸透しつつある
- 「高校生のための学びの基礎診断」の実施前後の教育活動を整理することで、日々の授業に対する生徒の意識を高めることを目指す

PROFILE



「創意・責任・勤勉」を信条とし、「知・心・技」それぞれの探究を通して、自分の道を考え、選択し、歩んでいく生徒の育成を目指す。2万人以上の卒業生が、デザイナーやエンジニアなどとして、社会の第一線で活躍。

設立	1917（大正6）年
形態	全日制／電子機械科・情報科・建築システム科・都市システム科・インテリア科・デザイン科・グラフィックアーツ科／共学
生徒数	1学年約280人
2020年度進路実績（現役のみ）	国公立大は、長岡造形大、金沢芸術大、愛知教育大に3人が合格。私立大は、愛知工業大、名城大などに延べ59人が合格。短大、専門学校進学70人。就職133人。
住所	〒461-0027 愛知県名古屋市東区芳野二丁目7-51
電話	052-931-7541
Web site	<a href="https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kogei-th/">https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kogei-th/</a>

「学びの基礎診断」の振り返りと  
学びの大切さを伝えたい

2020年2月、7つの科を擁する実業高校である愛知県・名古屋市立工芸高校は、「高校生のための学びの基礎診断」（以下、学びの基礎診断）の結果を振り返る会として、1・2年生合同の「マナフェス」を実施した。1・2年生全員が、「学びの基礎診断」の帳票の見方とそれを自分の学習改善に活用する方法を学んだ上で、学科・学年が混合のグループで問題解決型学習などの3つのミッションに取り組んだ。「マナフェス」の企画・運営を主導した建築システム科主任の深見信規先生は、こう説明する。

『マナフェス』は、『学びの基礎診断』の

振り返りを通して、生徒に学習のPDCAサイクルを身につけさせることと、これからの社会で求められる思考力や協働性などの重要性を、生徒に伝えることを目的として企画しました。活動内容を検討していくうちに、生徒が楽しみながら学びの大切さを感じられる機会にしようと、3つのミッションを取り入れました。『フェス』と銘打ったのも、生徒自身がイベントをつくり上げる楽しさを味わってもらうためでした」



校長  
**水野俊治** みずの・としはる  
教職歴32年。同校に赴任して6年目。「ポトムアップしやすくなる環境をつくる」



建築システム科主任・工務部  
**深見信規** ふかみ・あきのり  
教職歴18年。同校に赴任して18年目。「諦めたら終わり。前進あるのみ」



広報企画部主任  
**村山晴奈** むらやま・はるな  
教職歴19年。同校に赴任して13年目。「生徒の気持ちに寄り添い続けたい」



進路指導部  
**北村友香** きたむら・ゆか  
教職歴21年。同校に赴任して14年目。「自律した人材の育成を目指す」



進路指導部  
**池田征史** いけだ・まさくみ  
教職歴11年。同校に赴任して2年目。「生徒に理不尽を与えない」

## 生徒の行動に結びついているか 教師の疑問から取り組みを見直す

そもそも、「マナフェス」を企画した背景には、19年5月、「学びの基礎診断」の振り返りのために行った全校集会についての反省があった。

同校は、「学びの基礎診断」として「基礎力診断テスト」(\*1)を実施している。19年度の1回目の結果が返却された5月、全校集会を行い、「学びの基礎診断」の意義、GTZ(\*2)の見方、弱点克服に向けたアドバイスなどを生徒に伝えた。しかし、生徒は、返却された結果に関心を抱いた様子はなく、その後の学習でもほとんど変化が見られなかった。すると、教師からは、「何か工夫をしなければ、生徒は『学びの基礎診断』の結果を生かして自分の学習を変えようとはしないのではないか」といった声が上がった。

2回目の「学びの基礎診断」は、20年1月に実施の予定だった。教頭、教務主任、進路指導主事、各教科・学科の代表から成る委員会「チーム学び」から、「生徒に有意義な振り返りをさせるための機会にできないか」といった提案がなされた。それを受けて、委員の1人である深見先生が中心となって、「基礎力診断テスト」の内容をよく知る進路指導部員ら5人の教師で有志チームを結成。同チームが、2回目の振り返り会の企画・運営を主導することとなった。

「義務教育段階の内容を含む『基礎力診断テスト』で測定している教科の知識も、思考

力や表現力なども、進学・就職にかかわらず、これからの社会で必要となる力です。そのことをどうすれば生徒に実感を持って伝えることができるのかに重点を置いて、振り返り会の企画を検討しました」(深見先生)

## 授業で回すPDCAサイクルを 汎用的な考え方として意識させる

振り返り会の時間は、1回目の1時限50分間よりも格段に長い、午前の4時限分とした。当時、進路指導部に所属していた村山晴奈先生は、検討を始めた頃を次のように振り返る。

「振り返りが効果的にできなければ、『学びの基礎診断』の意義が半減してしまいます。生徒が最後まで集中して取り組み、やってよかったと思えるような場をどのようにすればつくれるか、メンバーで議論を重ねました」  
企画は、自校の生徒が「学びの基礎診断」を受ける目的を整理するところから始めた。

そもそも、「学びの基礎診断」のねらいは、基礎学力の確実な習得とそれによる生徒の学習意欲の喚起にある。そのため、結果の詳細なフィードバックを基に、学校は教育活動のPDCAサイクルを構築するが、生徒にも細かなフィードバックがなされている。それを基に、生徒自身が学習のPDCAサイクルを回せるようになることが理想であり、「学びの基礎診断」実施の意義の1つであると整理したと、有志チームのメンバーで進路指導部の北村友香先生は話す。

\*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。 \*2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

「生徒は、毎日の授業で学習のPDCAサイクルを回しています。例えば、工業の授業では、自分が作ったシステムが作動しなければ、その原因を検証し、改善点を見つけ出して、次の計画を立てます。既にPDCAサイクルを回す経験をしているのに、生徒は工業の授業内のこととしか認識していません。PDCAサイクルが、ほかの場面でも生かせる汎用的な考え方であることを実感させるとともに、それを身につけられるすべての授業の大切さに気づかせたいと考えました」

加えて、学科単位で実施される学校行事が多い中、「マナフェス」は、7科合同で実施し、科横断での生徒の交流を促す問題解決型学習に取り組む活動を設けることにした。同校では、1年次の「総合的な探究の時間」において、7科混合のグループで問題解決に取り組む「ミックス・ホームルーム」を行っている。それは、普段は交流の少ない他科の生徒を知ること、自分の強みや弱み、所属する科の特性を改めて認識する機会となっていた。「マナフェス」では、科に加えて、学年も混在させたグループワークを取り入れた。生徒に協働することの楽しさを味わわせるとともに、校内でさらなる科の連携を推進する契機にしたかったと、有志チームのメンバーである進路指導部の池田征史先生は語る。

「社会では、様々な立場の人と協働してプロジェクトを進める機会がたくさんあります。多様な学科があり、それぞれが強みを持

### 「マナフェス」のプログラム

**オープニング** AI時代においても必要とされる資質・能力について、校長からの講話。

#### 「学びの基礎診断」結果返却

#### ワークショップ

- ・ミッション1 「好きな食べ物」「今、熱中していること」など10項目から1つ選び、その答えを学年・名前とともに伝え合う形で自己紹介をする。
- ・ミッション2 途上国の感染症を防ぐために、子どもたちが手を洗いたくなる工夫を考える。
- ・ミッション3 思考力が求められる問題に取り組む。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

つ本校の特色を生かす機会を今後も設けたいと考えました。「マナフェス」での生徒の楽しそうな姿をきっかけに、7つの科の横のつながりが強まることを期待しました」

## 「社会で求められる力と関連づけて「学びの基礎診断」の結果を語る

そうして迎えた「マナフェス」は、1・2年生が体育館に集まってスタートした(図)。第1部では、まず石原正道前校長から、AI時代においても必要とされる課題発見・解決能力や思考力、表現力、協働性の重要性が語られた。

次に、20年1月に実施した2回目の「学びの基礎診断」の結果を返却し、帳票の見方や弱克服の方策を伝えた。帳票に示された指標(GTZ)の解説にとどまらず、同校の希望進路の傾向を踏まえて、社会で求められる資質・能力



写真 「学びの基礎診断」の1回目の結果返却時にはあまり関心を示さなかった生徒たちだが、「マナフェス」で返却した2回目の結果には、大きな関心を寄せていた。生徒同士で、改善点を話し合う声なども聞こえた。

とは何か、それは「学びの基礎診断」の結果のどのような点に表れているのかといったことを説明すると、生徒は、1回目とは異なり、皆、食い入るように帳票を見ていた(写真)。

第2部では、生徒は所定の教室に移動し、グループで3つのミッションに取り組んだ。

ミッション1は、自己紹介を兼ねたアイスブレイクだ。メンバーが初対面ばかりのグループも多いことから、緊張をほぐすため、学科・学年・名前を述べた後、「好きな食べ物」など、10項目から各自1つを選んでその答えを伝え合った。

ミッション2では、まず、WHO(世界保健機関)が実施した「HOPE SOAPプロジェクト」について学んだ。同プロジェクトは、途上国の感染症対策として子どもに石けんを配布する取り組みで、石けんの中にもちやを仕込んだところ、おもちゃほしさに石けんで手を洗うように

なり、感染症発症率が約7割減った成果も出ている。それを題材に、自分たちならさらにどんな工夫を施すか、アイデアを出すのがミッションだった。ちょっとしたアイデアで世界を変えられることを実感させるのと同時に、生徒同士でアイデアを出し合って1つの案にまとめる活動を通して、協働性を養うこともねらいとした。

ミッション3では、「学びの基礎診断」の記述式問題の振り返り教材を用いて、思考力が求められる問題にグループで取り組ませた。グループでの話し合いを通じて、1つの答えを導くことを経験させるのがねらいだった。

3つのミッションが終わると、マナビジョンの使い方を学ぶ講座とゲストの講演を行い、初めての「マナフェス」は幕を閉じた。

### 情報共有をすることで 周囲の教師からの助言も

「マナフェス」の実施に際して、有志チームが気を配ったのは、教師の負担をできるだけ抑えることだ。第2部では、生徒を21の教室に分け、各教室に教師を1人ずつ配置することにした。担当教師は、校内放送から流れる指示に沿ってプリントを配布し、生徒の活動の様子を見守る役割にとどめた。

ところが、教師からは、「それでは生徒から質問があった場合に対応できないので、イベントの詳細を教えてください」といった声が寄せられた。そこで、急ぎよ、取り組みのねらいと段

取りを、担当教師と共有する説明会を行った。

「教師の負担を増やさないとばかりに気を取られ、情報共有がおざなりになってしまった。運営者側は、実施者に十分な情報を提供することが責務であると痛感しました。また、たとえ賛否両論がある取り組みでも、引き受ける以上は全力を尽くしたいという教師の思いを、改めて感じた機会となりました。企画段階から周りにもっと相談をしてもよかったのだと、メンバーで大いに反省しました」  
(池田先生)

説明会に参加した教師からの提言を受けて、企画の一部の変更も行った。当初、グループ内の席は生徒同士で決めさせる予定だった。しかし、「予定の時間では短くて、席順を決められないグループが出る可能性が高い。そうしたら、その後の進行に遅れが生じる」といったアドバイスを得て、席順を事前に決めておくことにした。情報共有によって、教師の不安が和らいだだけでなく、取り組みの精度をより高めることにもなったのだ。当時、教頭として取り組みを見つめてきた水野俊治校長は指摘する。

「3年前に100周年を迎えた本校は、90周年の際に『次の100周年にちなんで、先生たちで100のプロジェクトを提案して実現していこう』と様々な取り組みを始めました。時には、職員たちが年代別に分かれて議論を深めるなど、ボトムアップで改革に取り組む土壌があったからこそ、今回のような学校を挙げて

の企画が実現できたのだと感じています」

### 約7割の生徒がイベントに満足 課題は日々の学習につなげる

「マナフェス」の成果は、生徒へのアンケート結果に表れている。第1・2部の内容について、約7割の生徒が「内容に満足」と回答をした。さらに、自由記述欄には、「講話でPDCAサイクルの大切さが分かった」「『学びの基礎診断』をする意味が理解できた」といった回答が書かれていた。グループワークで思考力が求められる振り返り教材に取り組んだことでも、「学びの基礎診断」が社会で必要な思考力を身につけるための機会であることを、多くの生徒が理解したのだ。

今後の課題は、「学びの基礎診断」を日々の教科指導や、生徒の学習行動のさらなる改善につなげることだ。

『マナフェス』では、『学びの基礎診断』の意義が、生徒に浸透した手応えがあったが、成果と呼べるものが表れるのはこれからでしょう。単体のイベントとして盛り上がるのではなく、日々の学習の中でも、問題解決能力や思考力、協働性の重要性を生徒が認識できるように、教育活動全体の流れを整理する必要があります。新しいカリキュラムに『学びの基礎診断』を位置づけ、学びの意欲を喚起し、学力向上に結びつく工夫をしていきます」(深見先生)